

三重県北・中部方言の現状：予備調査報告

吉田健二 勝田亜弓 苺谷美沙希 川北梓
小島愛加 柴田彩花 清水未希 松尾江利子
若園篤 渡邊彩 渡邊千裕

1. はじめに

本稿は、愛知淑徳大学国文学科・国語学演習を履修する学生と担当教員の吉田が実施した三重北・中部言語調査の報告である。三重県下のことばは、従来近畿方言に分類されてきたが（東条 1954 など）、経済面などで名古屋を中心とした中京圏の影響が強くなるにつれて、言語面でも、北部から愛知県西部方言の影響が強まっているといわれている（鏡味 2003 など）。報告する調査の目的は、現在の三重北・中部方言に愛知のことばの影響がどの程度及んでいるかを、語彙・文法・アクセント等の側面から総合的にさぐることである。以下、2 節で調査の概要を説明し、3 節で結果を報告し、4 節で今後のみとおしをのべる。

2. 調査概要

2.1. インフォーマント

三重における愛知のことばの影響をさぐる、という目的のもとづき、各市町の教育委員会のご協力により、表 1 の 4 市町・10 名の方からご自身のことばについてご教示いただいた。調査は 2014 年 9 月 8～12 日に各地の庁舎内会議室をお借りして実施した。以下では、各地の調査順に「桑名 1」「桑名 2」のようによぶ。今回の話者は、各省庁の職員の方が多く、各地域のことばを代表する

という点で問題がある可能性がある。調査規模も小さく、本稿はパイロット調査報告の範囲を出ない。(勝田亜弓)

表1 話者の情報(東から西の順)

略称	性別	年齢	生育地	職業
桑名1	男	90	桑名市内堀	自営
桑名2	女	83	桑名市森忠	自営
桑名3	女	38	桑名市松並町	公務員
朝日1	男	45	朝日町小向	公務員
朝日2	男	28	朝日町柿	公務員
鈴鹿1	男	54	鈴鹿市野辺町	公務員
鈴鹿2	女	25	鈴鹿市郡山町	公務員
鈴鹿3	男	49	鈴鹿市平田本町	公務員
亀山1	男	55	亀山市関町	公務員
亀山2	女	48	亀山市関町	公務員

2.2. 調査概要・各項目のねらい

調査項目を(1)に示す。各セクションの執筆担当者の提案にもとづき、討議を経て決定したもので、語彙・文法・アクセント・イントネーションにわたる。

(1) 調査項目

語彙 「におい」「翌々日」「朝礼台」

文法 授益の「たった」 終助詞「テ」 動詞打消形 動詞勧誘形 動詞希望打消形

イントネーション 質問イントネーションの印象 確認イントネーション

アクセント 2モーラ名詞4・5類 「めっちゃ」のアクセント

「朝礼台」・「テ」・動詞勧誘形、イントネーション、アクセントが、第一の目的である、三重北・中部における愛知方言の影響をみるための項目。一方、この地域独特の方言形式の衰退や拡大をみるための項目（におい・翌々日・動詞打消形）、京阪地域を中心とした近畿地方一般における動向と共通する変化を

さぐる項目も若干含めた（動詞希望打消形・2モーラ名詞4・5類）。

調査は対面式でおこない、一部、録音データも取得した。話者が調査に慣れるよう、地域独特の方言形式の項目を前半に実施した。また、一部の項目には話者記入式の質問紙を用いた（動詞打消形・動詞勧誘形・疑問イントネーションの印象評定）。

さらに項目の一部について、愛知における使用を確認するため、大学生への質問紙調査を実施した（朝礼台・動詞勧誘形・「テ」・めっちゃのアクセント：実施・集計は荻谷が担当）。インフォーマントは愛知淑徳大学・国語概説b（吉田担当）の受講者26名。愛知が22人と最多で、他は岐阜1名、三重1名、静岡2名だった。以下、三重臨地調査の結果を主に報告し、大学生調査もおこなった項目では、その結果も添える。

3. 結果

3.1. 語彙項目

3.1.1. 「におい」をあらわす語

「におい」をあらわす方言に「かざ」がある。三重県以外でも使われるが、『日本言語地図』（以下、LAJ）によると、三重県の一部の地域で「かざ」を「悪臭」という意味で使用し（269図・髪がこげるにおい）、「芳香」の意味では使用していない（268図・梅の花のにおい）。江畑（1985）は「悪臭芳香共にいう」とし、白塚山（1995）は悪臭と一般的なおいとしての用例を挙げる。『亀山市史』でも、小川町・加太板屋ともにたんに「匂い」の意味として「かざ」を挙げ、悪臭・芳香の区別をしていない。三重県方言の最新の調査（岸江他2013）でも「におい」は調査されていないので、現在の「かざ」の使用状況と、悪臭・芳香の区別を調べることにした。質問文はLAJのものを使用し、「かざ」が得られなかったばあい、「かざという語は知らないか」と誘導も実施した。

調査の結果、「かざ」を使うとこたえたのは鈴鹿1、桑名1の2名。亀山2は、自身は使用しないが祖母が使っていたとする。桑名1は今回の話者で最高齢であり、鈴鹿1は方言集（白塚山1995）の著者で、また仕事上、地元の住民に接する機会が多いため、方言使用に積極的なのではないかという指摘もあった。

この指摘をした鈴鹿3は「かざ」を使わず、地域方言の使用に慎重なようである(3.4.1節参照)。これ以外の話者からは「かざ」を使うという回答が得られなかった。また、「かざ」を使ったことがある話者はすべて「かざ」を「芳香」とこたえた。以上から、三重県では「かざ」という語はあまり使われなくなっており、また「かざ」の意味が「悪臭」から「芳香」へと変化していることが示唆される。(勝田亜弓)

3.1.2. 「翌々日」をあらわす語

富山県、岐阜県、三重県の一部の地域では、明明後日のことを「サ(一)サッテ」と言う(LAJ第285図)。「ササッテ」の語源意識としては、「再来週」の「サ」との関連や、三日後の「三」との関連が指摘される(LAJ第6集・解説、p.73)。LAJ以降「ササッテ」の使用に変化があるか、または衰退して共通語化が進んでいるのかをさぐるため調査にくわえた。明後日の次の日(今日から三日後)の呼称をたずね、その次の日(四日後)についてもたずねた。「三日後」を「シアサッテ」と答えたばあい、「四日後」を「ササッテ」とよぶ可能性を想定したものである。ササッテが得られなかったばあい、「ササッテという表現を聞いたことがあるか」という誘導質問もおこなった。結果を表2に示す。調査地点×年齢図(グロットグラム)を作成するほどの話者数はないので、以下、結果を示す表はすべて、左から南→北(西→東)の順で、かつ同一調査地内では年齢順に配列する。話者の下欄は調査時点(2014年9月)の年齢と性別(M:男性/F:女性)。

ササッテを使用する人と使用しない人は5名ずつ。ササッテを使用する話者は全員「翌々日」に対してであり、「四日後」に対してササッテを使う話者はみ

表2 「翌々日」4日後「サ=ササッテ、シ=シアサッテ、NA=無回答)

	亀山1	亀山2	鈴鹿1	鈴鹿3	鈴鹿2	朝日1	朝日2	桑名1	桑名2	桑名3
	55M	49F	54M	49M	25F	44M	29M	90M	83F	38F
翌々日	シ	サ	サ	サ	シ	サ	シ	シ	サ	シ
4日後	NA	シ	シ	シ	四日後	NA	NA	NA	シ	NA
誘導	聞く				知らない		聞く	知らない		聞く

られない。また、ササッテを使用する話者5名のうち4名が「四日後」をあらわす際にシアサッテを使用する。ササッテを使用しない話者は全員「三日後」の質問に、シアサッテと回答している。

ササッテの使用については、地域差ではなく年齢差があるように見受けられる。ササッテを使用するのは比較的年齢の高い話者であり、若い世代の話者が使用しない傾向にある。朝日2から、40代以上の者がササッテを使う印象があるというコメントもあった。LAJは1903年以前生まれの話者を対象とした調査結果だが、それ以降、この地域独特の方言形が後退し、日の呼び名にかんする語彙体系も単純化したことが示唆される。朝日1は、ササッテを使用する人と使用しない人との理解の齟齬を避けるためにササッテを使うことを避けるようになったとコメントしており、このような配慮が方言形の衰退に影響を与えた可能性も考えられる。また、鈴鹿1がササッテを頭高型アクセントで発音したが、それ以外は2核型だった。この「ゆれ」は、ササッテの語としての後退、使用頻度の低下にともない、伝統的なアクセント型も継承されなくなった結果かもしれない。(川北梓)

3.1.3. 「朝礼台」と「指令台」

学校の運動場にあり、集などで人が乗って挨拶や指示をする台は、一般には「朝礼台」だが、筆者たち(渡邊彩・千裕)の通った小・中学校では「指令台」とよぶ。学校で使用される語彙は地域性が強く、分布が狭いことが知られており、「指令台」もその可能性がある。

確認のため大学生調査にこれをくわえた。写真を提示し、「学校の運動場にある先生や生徒が乗って指示する台をなんとよぶか」という質問文で回答をもとめた結果、「朝礼台」と回答した学生が20名、「指令台」と回答した学生が7名だった(1名が「どちらも言う」)。「指令台」とこたえたのは全員愛知県在住であり、以下の地域である:東郷町(2名)、名古屋市北区(1)、名東区(1)、西区(1)守山区(1)、一宮市(1)。「どちらも言う」は一宮市。愛知東部の田原市・豊田市・豊橋市(計4名)や、愛知県外(4名)からは「指令台」は得られなかった。筆者二人の学校も春日井市と名古屋市中川区であり、「指令台」が愛知県西部に局在することがうかがえる。

三重調査でも同様に、写真を見せ、よび方をたずねた。「わからない。思い出せない」というインフォーマントには、「朝礼台、もしくは指令台とよびませんでしたか？」と誘導も行った。その結果、「指令台」は1名もおらず、鈴鹿1をのぞいて全員が「朝礼台」と回答した。鈴鹿1は「鈴鹿のみの呼び名があるが思い出せない」と指摘したが、鈴鹿3は地域特有の呼称はないとしており、この点は不明。桑名1は「そもそも学校に台がなかった」とのことだったが、誘導に対しては「朝礼台は知っている」とこたえた。以上のとおり、名古屋の「指令台」の影響は三重には及んでいないようである。「黒板消し」などと同様、学校生活をとおして習得されるため、分布が狭く、他地域に影響が及びにくいのだと思われる。

(渡邊彩)

3.2. 文法項目

3.2.1. 授益表現「たった」の意味・用法

友人が「徹夜してこの本を読んだったわ」と自慢げに話すのを目撃した。中部方言の「たった(だった)」は本来、「子供に本を読んだった」のように用い、授益をあらわす補助動詞である。しかし、冒頭のような使い方を耳にすることが少なくなく、かならずしも違和感がない。このことは、「たった」という授益表現が、自慢(態度)をあらわすモーダルの機能を獲得しつつある可能性を示唆する。一方、三重方言では、完了アスペクトを表す補助動詞に「たった」を用いる地域がある(伊勢地方、津市など、丹羽2000:29)。鈴鹿市方言についても、白塚山(1995:52)は「しもた」を載せるが、江畑(1985:25)は「忘レタッタ」「落シタッタ」などを挙げており、今回の調査地域でも、完了としての「たった」が使用されている可能性がある。そのばあい、補助動詞「たった」について、「授益~自慢」と「完了」の用法が衝突することが考えられる。そこで、本稿では以下の二つの問題点を検討する。

問題点1 「たった」という授益を表す補助動詞が、自慢(態度)へと意味・機能を拡大しているか。

問題点2 本調査の地域では、「たった」を完了形として使用するか。

(2)のように「授益」「自慢」「完了」の典型と思われる事態をあらゆる調査文(A、B、C)を作成した。また、「自慢」の「たった」は「インターネット上のスラングとして発達してきたものではないか」という指摘を受けたので、それを検討するための文も作成した(D)。これらについて、上記の3つの意味で使用するか、具体的には、たとえばAなら「本を誰かに読んであげたの意味で」「本を読んだことを自慢するようなニュアンスで」「本を読んでしまったのようなニュアンスで」使用するかをたずねた。それぞれ「授益」「自慢」「完了～失敗」の意味をあらわしたものである。

- (2) A「本を読んだった」(「授益」の典型)
- B「富士山に登ったった」(「自慢」の典型)
- C「牛乳こぼしたった」(三重方言「完了」の典型)
- D「合コン行っった」(ネットスラングにおける「自慢」の典型)

調査が実施できなかった桑名2をのぞく結果を表3に示す。Aは全員が「授益」で使うと回答した。「自慢」は4人と少なく、「失敗」はほとんどいない。典型的な「授益」と想定した文なので、予想どおりの結果である。Bでは「受益」が減り、「自慢」が増える。話者総数が9と少ないため、これが有意な異なりなのか不明だが、「たった」の意味が前接する動詞や文の内容によって変化し、「自慢」にちかづく傾向はみとめられるように思われる。Cでは「授益」はほとんどなくなり、「自慢」がやや多いが、どの意味でも「使わない」という回答が多く、3種類のいずれの意味でも理解が困難なようである。さいごにDは、「授益」または「自慢」が多いという点でBに似た回答傾向を示す。Bと同様の、意味の拡張の可能性を示すが、「使う」という回答が若い人に偏るともいえず、インターネット上のスラングである考えられるかどうか不明である。

「完了」用法については、「失敗」の意味で使用するという回答が全体で2件しかない。上述の江畑(1985)の記述から、この地域の伝統的な方言には完了の「たった」があったと思われるが、今回の結果は、その用法が後退し、意識されなくなった結果、今回の調査文が「失敗」の意味で解釈するのが困難だったことを示している可能性がある。

以上の当否をさらに検討するためには、南三重や伊勢地方など「たった」を完了形として使用する地域へ調査を拡大することが必要となる。また今回の調査では、インフォーマントが混乱するケースが多くみられた。調査方法や調査文などを改善することも課題である。(渡邊千裕)

表3 授益表現の使用範囲 ○:使用する ×:使用しない —:わからない NA:回答なし

		亀山1	亀山2	鈴鹿1	鈴鹿3	鈴鹿2	朝日1	朝日2	桑名1	桑名3
調査文	意味	55M	49F	54M	49M	25F	44M	29M	90M	38F
A 本を読んだった	授益	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	自慢	○	○	×	×	×	×	○	○	×
	失敗	×	×	×	×	×	×	—	×	×
B 富士山に登ったった	授益	○	○	○	○	×	×	×	○	—
	自慢	○	○	×	×	○	×	○	—	○
	失敗	×	×	×	×	×	×	×	NA	×
C 牛乳をこぼしたった	授益	×	×	×	○	×	×	×	×	○
	自慢	—	○	×	○	×	×	×	○	○
	失敗	NA	—	×	—	○	×	×	×	×
D 合コンに行ったった	授益	○	—	×	○	○	○	×	NA	○
	自慢	○	—	×	×	○	×	○	NA	×
	失敗	×	○	×	×	×	×	×	NA	×

3.2.2. 「強い訴えかけ」をあらわす終助詞「テ」

終助詞は地理的バリエーションが豊富なことが知られている。愛知・岐阜などに特徴的なものの一つが、強い訴えかけをあらわす「テ」で、「早く行けテ」「もういいテ」のように用いられ、「まさに自分もそう思っていた」という話し手の強い同意や賛意(芝田2008:52)をあらわす際にも用いられる。これが三重に使用を拡大しているかさぐるため、(3)の会話を示し、「そうなんだよ(そうなのよ)」の部分自身の言い方に直してもらった。心にかかっていることを相手が持ち出したことに反応して、その重要さを強く訴えるために「テ」が用いられており、「そうなんやて」あるいは「そうなんだって」が期待される。大学生調査では、友人の問いかけを「お母さん入院しちゃったんだって？」に入れ替えた。

- (3) 友人 「○○ちゃん (子供・孫)、骨折したんだって？」
あなた 「そうなんだよ (そうなのよ)」

大学生調査の結果を表4に示す。愛知については「そうなんだって」は使用も多く、「そうなんやて」はやや落ちるが、ほとんどが少なくとも耳にする。「テ」の終助詞用法は優勢と考えてよさそうである。愛知以外は人数が少ないため、たしかなことはわからないが、「使う」としたのは岐阜と静岡（湖西）であり、愛知を中心とした分布を示唆する。また三重の学生は「そうなんやて」「そうなんだって」ともに「聞くことがある」とこたえており、通勤・通学などをとおして、この表現が三重にも伝わっている可能性が考えられる。

三重調査では、「そうなんよ」「そうなんさ」などの回答が得られ、「そうなんやて」「そうなんだって」は皆無だった。「そうなんだって」とは言いませんか、と誘導も試みたが、「〈他者から聞いた〉という意味になる」という反応で、「テ」は伝聞、と理解しているようである。ただし、『亀山市史』では、加太板屋で「そうですね」の意で「ソーヤテ」を挙げており、ここでの用法とのつながりが考えられる。唯一、朝日2が誘導に対して「そうなんだって」は聞く、とこたえたが、今回の調査の範囲では、この終助詞の用法が三重に拡大している兆候はほとんど得られなかった。(若園篤)

表4 「そうなんだって・そうなんやて」の使用度(大学生26人、よく使う、たまに使う、聞くことがある、知らない、の4種類の回答の人数)

	愛知				愛知以外			
	よく	たまに	聞く	知らない	よく	たまに	聞く	知らない
そうなんやて	3	2	13	4	1	1	1	1
そうなんだって	16	4	2	0	0	2	2	0

3.2.3. 「やん」による動詞の打消形

三重方言の打消表現に「動詞＋やん」という形式がある。『方言文法全国地図』(以下、GAJ)で今回の調査地にもっとも近い四日市市では、「見る」「起きる」

など7つの一段動詞に「やん」による打消がみられる。また太田（2013）によると、「やん」の打消は、近年、三重全般において若年層で使用が拡大する傾向にあるという。そこで現在の三重北・中部方言での「やん」による打消の範囲を確認するため、表5の9つの動詞打消形の使用度を調べた。

一方、三重県の若年層の間では（4 a）のように、「やん」を含む「せやんね」を同意を示す場面で使用することも観察される。この「やん」は否定辞ではなく、大阪などの「やん」と同じ断定辞だと思われる。したがって、今回の調査地域の「やん」には、打消・断定の二用法の共存（衝突）の可能性がある。そこで、(4)のような質問を用いて、「せやんね」を同意（a）、あるいは「しないね」という意味の打消（b）のいずれかで使用するかどうかを調べた。

(4) (a) Bの「せやんね」を「そうだね」といった同意の意味で使いますか？

A「この間、家のごみ捨ててあったの。困るよね。」

B「せやんね。」

(b) Bの「せやんね」を「しないね」といった否定の意味で使いますか？

A「この間、道にごみを捨てている人がいたの。ふつう、そんなことする？」

B「せやんね。」

「蹴やん」は全員が使用しないとこたえた。GAJでは伊賀上野で「蹴やん」が得られており、下一段の「蹴る」なら「やん」の打消が可能だと思われるが、今回の話者では「蹴る」は五段活用への変化が完了しており、「やん」の接続が不可能になったのだと思われる。一方、「蹴る」以外の動詞については、ほぼ全員が「やん」の打消を使用する、または聞くとこたえた。GAJによれば、三重北・中部では、「見る」を例にとれば、打消型には「見ん」「見やせん」も使われる。今回は「やん」の打消形の使用の可否しかたずねていないため、他との併用状況は不明で、「やん」の使用が拡大しているかどうかはわからない。ただし、鈴鹿1と桑名1が⑥以外も使用しないとしているのは注目される。桑名1は今回の話者で最高齢であり、鈴鹿1も伝統的方言使用の傾向が強いと思われる（3.1.1節参照）。GAJで桑名に比較的近い員弁郡藤原町（現いなべ市）に「や

表5 「やん」による打消形の使用度 ○=使う、△=聞く、×=使わない

	亀山1	亀山2	鈴鹿1	鈴鹿3	鈴鹿2	朝日1	朝日2	桑名1	桑名3
	55M	49F	54M	25M	49F	44M	29M	90M	38F
① 飽きやん	○	○	○	○	○	○	○	○	○
② 見やん	○	○	○	○	○	○	○	○	○
③ 開けやん	○	○	×	△	○	○	○	×	○
④ 任せやん	○	○	○	△	○	○	○	×	○
⑤ 寝やん	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑥ 蹴やん	×	×	×	×	×	×	×	×	×
⑦ 来やん	○	△	○	○	○	○	○	○	○
⑧ しやん	○	△	○	○	○	○	○	○	○
⑨ できやん	○	○	○	○	○	○	○	○	○

ん」の打消がまったくみられないことも考えると、三重県北部の「やん」は比較的新しい可能性も考えられるが、80歳代の桑名2は自由会話中に「抜けやん」「入れやん」など「やん」による打消形を多用しており、年代差についてはまだ確証がない。

⑦～⑨では、ほぼ全員が「やん」の打消形を使うとこたえた。GAJは「来る」「する」の打消形も載せるが、三重北・中部では名張市の「来やん」以外、「来ん」「せん」と「ぬ」に由来する否定辞があらわれる。GAJの調査の時点では概略一段動詞の打消形に限られていた「やん」が、変格活用にも使用が般化された可能性、あるいは、動詞活用の再編（たとえば変格活用の一段活用への合流）を反映したものである可能性が考えられ、他の活用形や他の活用型も調べて総合的に判断する必要がある。

(4)ではほとんどの話者が同意(a)でも否定(b)でも使用しないとこたえたが、20代の鈴鹿3と朝日2のみが(a)の「せやんね」を使うとこたえ、朝日1も「そうやんね」なら使うとする。若年層の話者が少なかったこともあり、断定の意味の「やん」の動向については今後の検討にまつほかない。

(清水未希)

3.2.4. 動詞・否定の願望形「てらん～ていらん」

亀山市出身の40代の女性が、「来てほしくない」の意味で「来てらん」という表現を使うのを聞いた。この「来てらん」は、大阪などで使われる動詞否定の願望表現の「来ていらん」が短縮されたものと思われる。三重におけるこの形式の使用状況をさぐるため、標準語の「気を使うので、親戚も来てほしくない」という文を提示し、「来てほしくない」の部分を方言に直してもらおうようもとめた。「来てらん」または「来ていらん」があらわれなかったばあいは、誘導の質問も行った。また、「来る」以外の動詞に「一テラン」を使う表現を聞いたことがあるかもたずねた。

表6に結果を示す。「来てほし(く)ない」が優勢で、誘導なしで「来てらん」もしくは「来ていらん」をこたえたのは朝日1名、桑名1名のみ。またこの両者も、「来てほしくない」「来てほしくない」のどちらかまたは両方を聞いたことがある。このことからすると、「来てらん・来ていらん」はあまりさかんに使用されていない可能性が高い。話者数が少ないため地域差は不明だが、若い話者はこの表現を聞いたことがあるのみ、という傾向があるように思われる。「来る」のほかに「一テラン」「一テイラン」の表現をする動詞には、「して」「見て」「書いて」「行って」「読んで」「言って」「知って」があり、回答数が多かったのは多い順から「して」「見て」「書いて」だった。またこのばあい、縮約しない「一テイラン」の形をこたえる傾向があった。動詞によって縮約形のあらわれやすさに差があることが考えられる。(川北梓)

表6 「来てほしくない」の意味の表現 「回答」:●=キテラン、○=キテイラン、—=キテホシナイ、^=キテホシクナイ 「誘導」:聞=聞いたことがある 「他の表現」:し=して、見=見て、書=書いて、行=行って、言=言って、読=読んで、知=知って

	亀山1	亀山2	鈴鹿1	鈴鹿3	鈴鹿2	朝日1	朝日2	桑名1	桑名2	桑名3
	55M	49M	54M	49M	25F	44M	29M	90M	83F	38M
回答	—	—	—	—	^	—	○	—	●	—
誘導	●	○	○	○	聞(●○)	聞(●)	○	●	●	聞(○)
他表現	し行	見言談書	見知	し見言書知	し	見言書知	×	見行書	書知	見書

3.2.5. 動詞勧誘形「～まい」

愛知県の方言の特徴の一つに、助動詞マイによる動詞勧誘形がある。GAJ 第235 図では、愛知県を中心に中部地方で勧誘形にマイ類があらわれる。ここでは、愛知からの影響という観点から三重県における勧誘表現の使用実態をさぐる。「行く」「やる」「やめておく」「頑張る」の4語について、勧誘形の選択肢を示して使用をたずねた。選択肢は「行く」を例にとると、意思形接続の「イコマイ」、未然形接続の「イカマイ」、終止形接続の「イクマイ」のマイ類3つと、共通語の「イコウ」の4つで、これ以外を使うばあいはそれをこたえてもらった。「ヤメテオコー」のみ、上記4つに縮約形「ヤメトコ」を追加した。結果を表7に示す。なお「イコー」と「イコ」、「ヤメテオコー」と「ヤメトコ」は非縮約形と縮約形の関係にあり、このちがいは調査の目的にかかわらないので、同じ記号を与えた。

マイ類は桑名と亀山にみられた。マイの勧誘形には、未然形接続、終止形接続のタイプもあるが（江端 1977、彦坂 1998）、今回得られたのは意思形接続の「イコマイ」「ヤロマイ」等のタイプだけだった。江端（1977：図2）を参照すると、愛知県の影響によると考えて矛盾しない。桑名2は、文末詞「カ」を添えた「イコマイカ」「ヤロマイカ」を使うとのこと。桑名でイコ類が使われることは彦坂（1998）に指摘があるが、今回の調査では亀山にも「イコマイ」が得られた。ただし「イコー」をよりよく使うとのことだった。GAJでは、亀山の西隣の伊賀上野に三重では唯一「イコマイ」がある。『亀山市史』でも「しようか」の意で「ショーマイカ」を載せており、今回の結果と整合する。今回の結果が三重北・中部方言の現状を反映しているとするれば、愛知のマイ類の影響は

表7 動詞勧誘形 —:(r)○あるいは(r)○○ ●:(r)oni ▲:(r)omai ×:(r)ahen

	亀山1	亀山2	鈴鹿1	鈴鹿3	鈴鹿2	朝日1	朝日2	桑名1	桑名2	桑名3
	55M	49M	54M	49M	25F	44M	29M	90M	83F	38M
行こう	—▲	—	—●	—●	—	×	—	—▲	—▲	—
やろう	—	—	—●	—●	—	×	—	—▲	—▲	—
やめておこう	—	—	—●	—●	—	—	—	—▲	—	—
かんばろう	—	—	—●	—●	—	—	—	—▲	—▲	—

先行研究が記述した状況からほとんど拡大していないことになる。大学生調査では、愛知県出身者は22名中、4語の中で1語でもマイによる勧誘形を使用すると回答したのは6名のみだった。愛知でもマイ類が衰退していることがうかがえ、三重への影響の小さいことがうなずける。

ところで鈴鹿では、「海へイコニ」のような、「意志形+ニ」の形もみられた。丹羽（2000：33）は、伊勢では動詞の意志・勧誘形に「ニ」をつけるとするが、今回の調査では鈴鹿のみだったうえ、「イコー」のタイプとの併用であり、4地域全体として共通語のウ類が優勢である。以上をまとめると、調査地域全体としてウ類による共通語化が進行し、マイ類の三重への進出はほとんどすすんでいない、ということになる。（柴田彩花）

3.3. イントネーション項目

3.3.1. 疑問イントネーション

近年、中部地方において、いわゆる Yes-No 疑問文に従来と異なるイントネーションが使用される傾向がみられる。図1のBが一例で、Aのような、疑問の終助詞「の」に局所的なピッチ上昇がある従来タイプと異なり、句全体がゆるやかな上昇調のピッチパターンをともなって発話される。この新しいイントネーションは、愛知ではあまり良い印象を与えないように思われる。では、今回の調査地域ではこのイントネーションは使用・認知されているのか、またそうだとするとどのような印象でとらえられているのだろうか。

A・B二種の「バレーできんの？」の音声を提示し、下の5つの評価項目それ

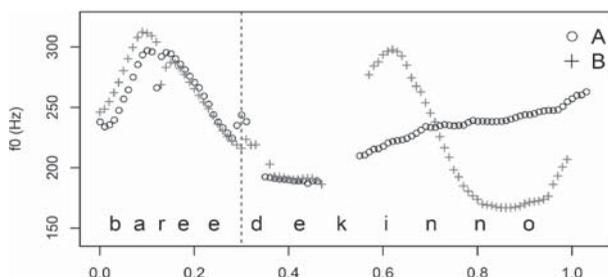


図1 「バレーできんの？」の二種類のイントネーションのピッチ動態。

ぞれに「1 =まったくそう思わない」から「5 =とてもそう思う」まで5段階の評定を与えてもらった（ことばによる説明を付したのは両極のみ）。刺激音声は筆者たちが発音したものを使用した。特定の話者の印象の評定が強く左右されないよう、同じイントネーションによる4名（愛知または岐阜方言話者）の発話サンプルを続けて聞かせたのちに評価をもとめた。図1は刺激音声の一例（愛知県春日井市）。イントネーションタイプの提示順の影響が相殺されるよう、A、Bの提示順を調査ごとにAB、BA、AB、…と交互に変更した。また、話者の求めに応じて、繰り返し聞くことを許容した。

- (5) 評定項目
- 1 疑われ納得されていないと感じる
 - 2 ばかにされていると感じる
 - 3 普通に質問されていると感じる
 - 4 あきれられていると感じる
 - 5 確認されていると感じる

評定結果を表8に示す。各セルの左がAの、右がBにたいする評定である。グレーのセルは、Aの評定がBより高いケースで、(1)「バレーができるか」「疑われている」あるいは(2)「馬鹿にされている」に多い。さらに、(4)「あきれられている」もAが上回ることが多い。ゴシックのセルは、逆にBの評定が高いケースで、(3)「ふつうに質問されている」(5)「確認されている」という中立の印象に多い。

このように、Aのイントネーションがマイナス印象を与えることが確認された。すべての項目でA・Bに差を与えなかった朝日1をのぞくと評定の傾向の一致度は高く、年齢・地域・性による差はみられない。三重北・中部でも、この新しいイントネーションについて愛知と同じようなとらえ方をしていることが考えられる。これが愛知の影響によるものなのかについては、データを増やし、年齢差・地域差などが見出されるかなどの検討をとおしてさらに考える必要がある。また、中立および否定的な評定のみを与えたことの影響も考えられるため、評価項目を見直すなどの改善も必要である。（松尾江利子）

表8 「バレーできんの？」の2種類のイントネーションの5段階評定(左がA、右がB)。グレーのセルはAの評定が高く、ゴシック文字のセルはBの評定が高い。

	亀山1	亀山2	鈴鹿1	鈴鹿3	鈴鹿2	朝日1	朝日2	桑名3
評定	55M	49F	54M	49M	25F	44M	29M	38M
1 疑われている	5/1	4/3	4/2	5/2	2/1	1/1	4/1	2/3
2 ばかにされている	4/1	4/2	3/2	5/2	4/1	2,4/2,4	4/1	5/1
3 ふつうに質問されている	2/4	2/4	3/3	1/3	2/5	NA	1/5	1/4
4 あきられている	4/1	2/3	1/1	5/2	4/3	3,4/3,4	3/1	5/1
5 確認されている	2/5	2/4	3/5	2/4	4/5	1/1	1/3	1/5

3.3.2. 確認イントネーション

三重の若者の間で「そうなん？」のイントネーションがまるで「遭難」と聞こえるようなものになってきているという。愛知でもよく耳にする、図2の+ sample1のようなピッチパターンだと思われる。もう一方の○suzuka3にあるような、「そう」のアクセントによる下降がなく、疑問を示す発話末の上昇も小さく、発話末の初頭から発話末にかけてゆるやかな上昇調を示す。

今回の調査では、「そうなん？」という表現そのものの使用と、新イントネーションを使用するか、あるいは聞いたことがあるかを調べた。まず、(6)の文を

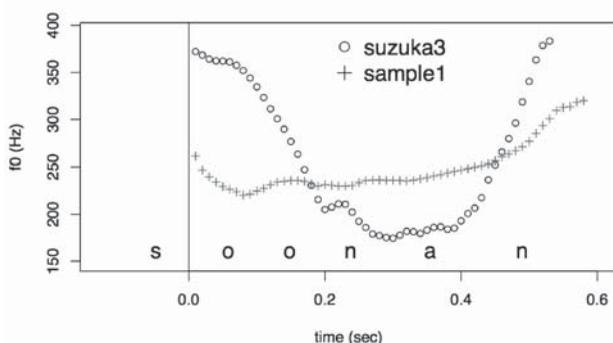


図2 「そうなん？」の2種類のイントネーションのピッチ動態。○は鈴鹿3の発話、+は聴き取り調査に用いた音声の一つ(話者は筆者)。いずれも子音[s]の終端を基準(0.0秒)として表示。

インフォーマントに見せ、Bの「そうなの？」の部分方言に直して発話することをもとめ、録音した。

- (6) Aさん「この回覧板、明日には回さないといけないんだって」
Bさん「(期日について知らなかったとして) そうなの？」

つぎに、筆者のうち二人(愛知県春日井市、三重県桑名市)が新イントネーションで発話した「そうなん？」を聞かせ、そのイントネーションを使用する、また耳にしたことはあるかをたずねた。聞いたことがあると回答したばあい、どのような人が使用していたかもたずねた。

発話調査では、全員から図1のsuzuka3に類似した旧イントネーションの「そうなん？」が得られた。この表現がもっとも常用のものであることがうかがわれる。聴き取り調査では、鈴鹿1をのぞく全員が新しいイントネーションを「聞いたことがある」と回答。朝日2のみ「自分も使用している」と回答した。つぎに新イントネーションの使用者の印象については、「こちら辺の人ではない気がする。県内の高校生の子が使っている」「東京語のような印象を受ける。大学進学のため東京で一人暮らししている娘(20代)がこのような言い方をする」などの回答があった。亀山1・亀山2からそれぞれ、「妻、娘、子どもが使う」「(近隣の小学校の)50代の教員が使う」と、具体的に使用者を示す回答もあり、身近な人から耳にし、印象に残っているイントネーションであることがうかがえる。以上のとおり、「そうなん？」という確認質問の形式だけでなく、その新しいイントネーションも、若い世代を中心に使用が拡大中であると推測される。亀山の中年層の教員についての使用の報告も、職業柄接する機会の多い子どもや若い父母から習得した結果であることが考えられる。

この新イントネーションと音調実質が似たものに「とびはね音調」(田中・林2013等)がある。首都圏を中心に使用が拡大してきた、「同意要求」のイントネーションとされているが、ここで検討した「そうなん？」の機能は、(6)の例のように相手の発言の真偽の確認だと思われる。「とびはね」については、その発生(普及)の理由の一つに、首都圏方言における形容詞アクセントの平板型と起伏型の混同傾向があげられるが(井上2008:380-381)、形容詞アクセント

の起伏型への統合が完了している愛知・岐阜などの地域でも、たとえば「甘い？」「冷たい？」のような、形容詞を用いた確認質問でも新イントネーションが使われるのか、使用の拡大や印象などの面で「とびはね」とちがいがあのか等、今後検討したい。また、この確認イントネーションの発生に、「とびはね」等の首都圏のイントネーションの影響が働いた可能性や、意味・機能の異同についてもさぐりたい。(渡邊彩)

3.4. アクセント項目

3.4.1. 2モーラ名詞4・5類アクセントの合流・東京式への変化

京阪式諸地域では、名詞アクセント体系の単純化傾向、具体的には2モーラ名詞の「低起式無核型」と「低起式2核型」の合流が進行中であることが知られている(真田1987等)。今回の調査地については、岸江・村田(2012:42)の「名古屋市一伊勢市間グロットグラム」で、15年ほど前の状況をうかがうことができる。分布は入り組んでいるが、概略、四日市市以北で東京式アクセント化した話者が多い。一方、朝日町を北限として南に行くほど、2モーラ名詞4・5類が合流した京阪式(以下、仮に「新京阪タイプ」とよぶ)の話者が増える。揖斐川以北では、古い分布のとおり、東京式のみになるが、それ以南ではいずれの地域でも、40代以上になると4・5類の対立を維持する京阪式(以下、「旧京阪タイプ」)が多い。東京式の分布にもどると、鈴鹿市以南では河芸町の1人のみで、今回の4地点は、中京地域の東京式の影響が到達した南限あたりをまたいでいるという予測が得られる。一方、これより10~15年新しい調査にもとづく竹内(2014)によれば、鈴鹿市では東京式アクセントの影響を受容した中間型と判断された話者が21/35人と多数を占め、東京式と判断された9人を合わせると、東京式への変化が急速に進んでいることをうかがわせる。

ところで、郡(2012)によると、大阪市の1981~1989年生まれの話者では、「東北は雪多いけど、沖縄は雨多いで」のように、助詞なし、かつフォーカスの置かれる環境においたばあい、4・5類が区別される傾向がみられたという。このような、潜在的な音韻対立がある条件下で顕在化する傾向が今回の調査地にもみられるのか、興味もたれる。以上をふまえ、以下の3点について検討する。

- 問題点1 東京式アクセントへの変化がどのくらい進行しているか
- 問題点2 京阪式諸地域で報告されている新京阪タイプへの変化の兆しはみられるか
- 問題点3 潜在的なアクセント型の対立がある発話環境で顕在化する現象はみられるか

(7)の2モーラ名詞4・5類それぞれ6語ずつを調査語とし、(8)のように3つの発話環境におき、異なるランダム順で2回発話していただいた(一部1回のみ)。

(A)は助詞ありで、「昨日」「もう」につづく、強いフォーカスは生じないと予測される環境。(B)は同じ文の助詞をとったもの。(C)は、前半に「海老ちごて」のように、対比する語を否定する句をおいて、調査語を含む「蛇おってん」の部分に対比フォーカスが置かれるようにしたもの。ただし、(C)は「助詞なしでは言いにくい(言わない)」という話者(鈴鹿1)や、提示した調査文にはない助詞を発話時に挿入する話者がいたが、強いて助詞なしの発話を要求することはしなかった(表9(C)の注を参照)。「ちごて」「おってん」の部分は各話者にとって適切な形に修正していただいた(「海老ちゃって」「蛇おったんさ」等)。桑名2はアクセント調査を実施できなかった。

(7) 調査語 2モーラ名詞4類 海・帯・船・苗・肌・毘(6語)

5類 雨・猿・窓・春・蛇・鮒(6語)

(8) 調査文

(A) 助詞あり・強調なし 例「昨日蛇が出たで」「もう舟に乗ったで」

(B) 助詞なし・強調なし 例「昨日蛇出たで」「もう舟乗ったで」

(C) 助詞なし・対比フォーカスによる強調あり

例「海老ちごて、蛇おってん」「飛行機ちごて、舟乗ってん」

音調型の認定は吉田と小島が独立に行ったのちに、ピッチ動態を参照して一本化した(両者の異なりは一カ所のみ)。表9に結果を調査文の順に挙げる。東京式アクセントなら4・5類ともHL(L)型であり、旧京阪アクセントなら4類=LL(L)型 5類=LH(L)型であられる(H=高いピッチ、L=低いピッチ)

表9 2モーラ名詞アクセント

(A) 助詞あり・強調なし —: LL(L) △: LH(L) ●: HL(L) NA: 調査漏れ

語類		亀山1	亀山2	鈴鹿1	鈴鹿3	鈴鹿2	朝日1	朝日2	桑名1	桑名3
		55M	49F	54M	49M	25F	44M	29M	90M	38F
海	4	— △	△ —	— —	● ●	● ●	△ △	△ △	●	△
帯	4	△ △	— —	— —	● ●	△ △	△ △	△ △	—	△
舟	4	— —	△ —	— —	● ●	△ △	△ △	● △	—	△
苗	4	△ —	— —	— —	● ●	△ △	△ △	△ △	—	△
肌	4	△ △	△ —	— —	● ●	△ △	△ △	△ △	●	△
畏	4	— —	● ●	— —	● ●	● ●	● ●	△ △	●	△
雨	5	△ △	△ △	△ △	● ●	△ △	△ △	△ △	△	△
猿	5	△ △	△ △	△ △	● ●	△ △	△ △	△ △	△	△
窓	5	△ △	△ △	△ △	● ●	△ △	△ △	△ △	△	△
春	5	△ △	△ △	△ △	● ●	△ △	△ △	△ △	△	△
蛇	5	△ △	△ △	△ △	● ●	△ △	△ △	△ △	△	△
鮒	5	△ △	△ △	△ △	● ●	△ △	△ △	△ △	△	△

(B) 助詞なし・強調なし

語類		亀山1	亀山2	鈴鹿1	鈴鹿3	鈴鹿2	朝日1	朝日2	桑名1	桑名3
		55M	49F	54M	49M	25F	44M	29M	90M	38F
海	4	— —	△ —	— —	● ●	— —	— —	— —	△	△ —
帯	4	— —	— —	— —	● ●	— —	— —	— —	—	— —
舟	4	— —	— —	— —	● ●	— —	— —	— —	—	— —
苗	4	— —	— —	— —	● ●	● —	— —	— —	—	— —
肌	4	— —	— —	— —	● ●	— —	— —	— —	●	— —
畏	4	— —	● ●	— —	● ●	● ●	● ●	— —	●	— —
雨	5	△ △	△ △	△ △	● ●	△ △	△ △	△ △	△	— △
猿	5	— —	— —	△ △	● ●	— —	— —	— —	△	— △
窓	5	— —	— —	△ △	● ●	— —	— —	— —	△	— —
春	5	— —	— —	△ △	● ●	— —	— —	— —	△	— —
蛇	5	△ —	— —	△ △	● ●	— —	— —	— —	△	— △
鮒	5	— —	— —	— —	● ●	— —	— —	— —	△	— —

(C) 助詞なし・対比フォーカスあり

注：鈴鹿3の「舟」は非常に強い強調をとめない、HHで発音。低起無核LLの変種と判断した。鈴鹿1はすべて、鈴鹿3は「苗」をのぞいてすべて、桑名1は「苗」「猿」をのぞいてすべて、助詞ありで発話。

語類		亀山1		亀山2		鈴鹿1		鈴鹿3		鈴鹿2		朝日1		朝日2		桑名1		桑名3	
		55M	49F	54M	49M	25F	44M	29M	90M	38F									
海	4	—	—	—	△	—	—	●	●	—	—	—	—	—	—	—		—	—
帯	4	—	—	—	—	—	—	—	△	—	—	—	—	—	—	—		—	—
舟	4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		—	—
苗	4	—	—	—	△	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		—	—
肌	4	—	—	—	—	—	—	△	△	—	—	—	—	—	—	●		—	—
畏	4	—	—	●	△	—	—	—	●	●	—	●	●	—	—	●		—	—
雨	5	△	△	△	△	△	△	△	●	△	△	△	△	△	△	△		△	△
猿	5	—	—	—	—	△	△	●	△	—	—	—	—	—	—	△		—	—
窓	5	NA	NA	△	△	△	△	△	△	—	—	—	—	—	—	△		—	—
春	5	—	—	—	△	△	△	●	△	—	—	—	—	—	—	△		—	—
蛇	5	△	—	—	—	△	△	△	●	—	—	—	—	—	—	△		△	△
鮎	5	—	—	△	—	△	△	△	●	△	△	—	—	—	—	△		△	—

チ)。各音調型は表(A)の上に記した記号で表示する。●があれば東京式。表の上半分(4類)の6語が「—」下半分(5類)の6語が「△」となっていれば、旧京阪タイプである。

以下、見出された傾向についてのべる。第一に、東京式の音調は鈴鹿3をのぞいて散発的にみられるのみで、京阪式の音調が優勢である。唯一、東京式とみえる鈴鹿3も、(C)の調査文では京阪式の音調があらわれ、4類にはLL型、5類にはLH型が多いことから、4・5類の区別をあるていど保持していることがうかがえる。この話者は地域言語志向がそれほど強くないようであり(3.1.1節参照)、調査場面を強く意識したため東京式での発話がつづいたが、(C)の調査に至って、抑えられていた京阪式アクセントが顔をのぞかせたものと推測される。アクセント調査は実施できなかったが、自由発話で終始京阪式で話していた桑名2も含めて、10人全員が京阪式アクセントの能力を保持していると結論づけられる。個々の語については、「畏」に東京式がめだつ。比較的使用頻度

や親密度が低い語と考えられ、そのため伝統的アクセントではなく共通語アクセントを習得した話者が多かったためかと推測されるが、かなり頻度が高いと思われる「海」にも東京式がややめだつ。親密度の高さはアクセントの共通語化をとどめる方向にも、促進する方向にも働く可能性があり(吉田 2001)、今回のデータにどのように作用したかは不明で、共通語化の語彙的な遅速については、さらに検討が必要である。

つぎに 4・5 類の合流傾向についてみる。先に全体の傾向を整理すると(9)のようになる。上述のとおり全員京阪式の能力があることが確認されたので、ここでは、京阪式で旧タイプか新タイプかということのみを問題にする。

- | | | |
|-----|------------------|---------------------|
| (9) | a. 旧京阪タイプの話者 | 鈴鹿 1 |
| | b. 旧京阪～新京阪の中間の話者 | 亀山 2 鈴鹿 3 桑名 1 桑名 3 |
| | c. 新京阪タイプの話者 | 亀山 1 鈴鹿 2 朝日 1 朝日 2 |

鈴鹿 1 は、調査文 (A)～(C) をとおして 4・5 類をほぼ完全に区別しており、旧京阪タイプとみなせる。桑名 1 は (B) の「海」をのぞくと 4・5 類の区別は完全であり、旧京阪に近い。亀山 2 は (A) ではかなり区別を示すが、(B) では類にかかわらずほぼ LL のみである。(C) でも区別の傾向はあるものの不完全で、4・5 類の各語のアクセントがゆれた状態にあり、2 モーラ語について、低起式無核と低起式 2 核という音調型の対立が曖昧になりつつあると推測される。一方、朝日 1、朝日 2 は (A)～(C) をとおして 4・5 類の区別がなく、二つの音調型の合流がほぼ完了しているため、新京阪タイプとした。亀山 1、鈴鹿 2 は朝日 1、朝日 2 に比べると 4・5 類の区別の傾向がみられるが、その傾向は微弱であり、新京阪タイプに準ずるものとして (C) に分類した。この分類はあくまで便宜的なもので、旧京阪から新京阪への推移には連続的な面がありそうに思われる。重要なのは、鈴鹿 1 (および桑名 1) をのぞくほとんどの話者で、程度のちがいこそあれ新京阪タイプへの移行がみられることである。

これとならんで重要なのが、4・5 類合流傾向にあるばあいの (A) と (B) の実現形のちがいで、(A) では 4・5 類ともに LH 型に、(B) では LL 型になる傾向がある。これが大阪市方言についての郡 (2012) の観察報告と同じであるの

は注目に値する。潜在的区別が顕在化しやすいとされていた調査文 (C) についても、鈴鹿2、桑名3のように、(A) では類にかかわらず LH のみだったが、(C) では4類はほぼ完全に LL 型、5類には LH が散見する、というように、音調型の対立が顕在化する傾向がみとめられる。

総合すると、今回の話者全体として京阪式の新しいタイプへの変化が進行していることが確認され、さらに、その実現形の条件変異（助詞あり LHL～助詞なし LL）や、4・5類の対立が顕在化する環境（助詞なし・フォーカスあり）にいたるまで、大阪市における様相と類似の面がみられた。この知見は、今回の調査地のアクセント体系が、京阪式主流の大阪などで起きている変化と、細部にいたるまで軌を一にする変化を進行させている面がある可能性を示唆する。上記3つの問題点について、暫定的ながら、以下のみとおしが得られる。

- 問題点1 東京式への変化は、語彙的な影響にとどまり、それほど強くない
- 問題点2 新京阪タイプへの変化はほとんどの話者でみられ、ほぼ完了した話者もいる
- 問題点3 旧京阪タイプの対立の中和・顕在化に関して、大阪（郡 2012）と似たパターンがみられる

さきに問題点2・3からのべる。今回の結果を岸江・村田（2012）の「名古屋市—伊勢市間」データと比べると、この地域でも新京阪タイプへの移行がさらに進んでいるように見える。一方で、調査文 (A) ではとらえられなかった4・5類の対立が、調査文 (C) で顕在化するケースもあった。この地域のこれまでのアクセント調査でも、調査文の環境が限られていたため潜在的な旧京阪タイプの言語知識がとらえられなかったことがあった可能性があり、京阪アクセント革新の進行の程度を判断するにあたって、より慎重な検討が必要であることを示唆する。

次に問題点1についてのべる。桑名・朝日という愛知に近い地域の20、30代の話者でも、東京式の影響は個別の語彙の散発的な影響にとどまり、ほぼ全員が基本的に京阪式アクセント（の能力を保持している）という結果であった。10～30代、したがって現在の40歳代くらいまで東京式がみられるとする岸江・

村田 (2012) の結果とはやや異なる。さらに、話者の多くに東京式への変化を指摘する竹内 (2014) とは大きく異なる。この理由は現時点では不明だが、竹内 (2014: 表 2) の、京阪式 (A タイプ) と、京阪式・東京式が混在するタイプ (AB) のちがいは、たとえば、HHL 型が減り HLL 型が増えるような、京阪式地域で広くみられる変化 (秋永 1986) も見出される。今回の結果にてらすと、東京式の影響と考えられているものの中にも、むしろ京阪式諸地域で進行中の変化と軌を一にする、京阪式における革新の傾向がひそんでいないか、検討の余地があるように思われる。 (吉田健二・小島愛加)

3.4.2. 程度副詞「めっちゃ」のアクセント

この項では、程度副詞「めっちゃ」のアクセントについてのべる。三重調査では「この料理はとてもおいしい」という文を提示し方言文に直すことをもとめた結果、「とても」の部分に「めっちゃ」を回答した人は 10 人中 7 人だった。鈴鹿方言を収集した江畑 (1985)、白塚山 (1995) にも「めっちゃ」がみられ、今回の調査地域における伝統的方言形であることがうかがわれる。また、大学生調査では 26 人全員が使うとしており、愛知などの若年層でも使用度が高い。

つぎにアクセントをみる。三重での調査では「めっちゃ」を使用した 7 人に発話をもとめ、録音した。第 3 モーラ「ちゃ」が高く発音される LLH 型、第 1 モーラ「め」が高く発音される HLL 型、すべて低く発音される LLL 型の三つの音調型がみられた。音調型ごとの話者は(10)のとおりである。また大学生調査では、26 人中 24 人が LLH 型で、HHH 型と HLL 型が 1 人ずつみられた。

- (10) LLH 型 亀山 1、鈴鹿 2、鈴鹿 3、桑名 3
HLL 型 鈴鹿 1
LLL 型 朝日 1、朝日 2

大勢をしめる低起式無核の LLH 型および LLL 型が京阪式アクセント地域全般で優勢なアクセント型であり、2 モーラ名詞アクセントについて、ほぼ全員が京阪式の能力を保持していることと整合する。「めっちゃ」という程度副詞は、語形・アクセントの両面で、従来の形を維持しているということが確認さ

れた。「めっちゃ」は使用頻度が高く、とくに若者の間では日常的に使われると考えられる。この副詞をとくに頻用する関西系の TV タレントはやはり低起式無核型での発音が多く、今回の地域での伝統的音調型の保持を支える要因として働いていることも考えられる。

(小島愛加)

4. まとめと課題

さいごに結果をふりかえる。まず注目されるのが、中京圏の「指令台」・「テ」・勧誘の「マイ」が、今回の調査地域（三重北・中部）にほとんど拡大していないことである。2モーラ名詞アクセントも東京式の影響は先行研究から想像されるより弱く、むしろ京阪式全般にみられる改新の反映がめだった。これに対して、新しいイントネーションは自身で使わないまでも耳にはするようで、使用者のイメージや印象が話者間で一致する傾向がみられた。一方、伝統的方言の「かざ」・「ささって」・完了の「たった」は勢力を失っているようだが、打消の「やん」はむしろ使用範囲を拡げているようにみえる。

真田（1988）によると、桑名市では自分たちは西日本に属しているという意識を持つ人が多い。30年ほどを経て、この地域の人々のことば意識がどう変化し、それが中京圏のことばの受容にどう影響しているか興味を持たれるが、今回の結果は、三重北・中部が、中京圏に対して、いまだ言語圏として一定の独立性を維持していることを示唆する。

今回の報告は、小規模の予備調査によるものであり、得られた知見はすべて暫定的なものにすぎない。また、今回の話者は、市町（教育委員会）の職員や、その呼びかけに応じて協力してくださった、地域文化の記録・研究に対する理解・熱意のある方々だった。そのため地域方言にたいする愛着が強く、伝統的な地域のことばの使用に積極的な人が多い可能性もある。今後もこのような不備を改善しつつ調査を継続し、この地域のことばに対する理解を深めていきたい。

謝辞

言語調査にご協力くださった各市町の教育委員会のみなさん、話者のみなさんに心よりお礼申し上げます。鈴鹿市の白塚山隆彦氏には、研究文献のご教示・ご提供をいただきました。この研究は、愛知淑徳大学の「学外教育等活動」の助成金の支援を受けています。

参考文献

- 秋永一枝 (1986) 「アクセント概説—史的变化と方言分布—」『講座方言学 1』5 章
国書刊行会
- 井上史雄 (2008) 『社会方言学論考』明治書院
- 太田有多子 (2013) 「紀伊半島沿岸部における打消表現」岸江他編 (pp. 63-90)
- 亀山市史編さん推進委員会 (2011) 「亀山市史 民俗編 口頭伝承(三) 方言」URL:
http://kameyamarekihaku.jp/sisi/MinzokuHP/jirei/bunruil1/data11-3/index11_3.htm
- 岸江信介・村田真美 (2012) 「京阪式アクセントにおける 2 拍名詞の類の統合状況と低起式無核型の消失傾向—大阪・奈良・三重・徳島方言を中心に—」『音声研究』16(3): 34-46
- 岸江信介・太田有多子・中井精一・島谷善史 (2013) 『都市と周縁のことは—紀伊半島沿岸グロットグラム』和泉書院
- 江畑哲夫 (1985) 『鈴鹿市のことは—三重県鈴鹿市の方言—』土井出版
- 江端義夫 (1977) 「中部地方の方言についての方言地理学的研究 (II) —「海へ行こう (勧誘表現)」の分布とその考察—」『広島大学教育学部紀要 第二部』26: 13-22
- 鏡味明克 (2003) 「三重県」『月刊言語』32(1): 76-77
- 郡史郎 (2011) 「大阪市方言若年層の二拍名詞 4 類・5 類のアクセントについての—考察」杉藤美代子 (編) 『音声文法』くろしお出版 (pp. 229-250)
- 国立国語研究所 (1974) 『日本言語地図 第 6 集』大蔵省出版局
- 国立国語研究所 (1991、2002) 『方言文法全国地図 第 2 集、第 5 集』財務省印刷局
- 真田真治 (1987) 「ことばの変化のダイナミズム—関西圏における neo-dialect について—」『言語生活』429: 26-32
- 真田真治 (1988) 「方言意識と方言使用の動態—中京圏における—」国立国語研究所編『方言研究法の探索』(pp. 41-80)
- 芝田卓哉 (2008) 「岐阜市方言の文末詞「テ」」『阪大社会言語学研究ノート』8: 46-

- 白塚山隆彦 (1995) 「鈴鹿弁しゃべれやんだら、やっていけーへんわさ! (鈴鹿方言集)」鈴鹿市職員労働組合編『あゆみ』47-61
- 竹内はるか (2014) 「三重県鈴鹿市方言の名詞アクセント」『第 28 回日本音声学会全国大会予稿集』11-16
- 田中ゆかり・林直樹 (2013) 「首都圏周辺部における新しい音調の受容パターン—『とびはね音調』と複合語アクセント—」アクセント史資料研究会『論集 IX』(pp. 17-30)
- 東条操 (1954) 「国語の方言区画」『日本方言学』吉川弘文館 2 章
- 丹羽一彌 (2000) 「三重県のことば」平山輝夫 (編)『日本のことばシリーズ 24』明治書院
- 彦坂佳宣「東海西部地方における勧誘表現の言語地理学的研究」『立命館言語文化研究』9(3): 1-17
- 吉田健二 (2001) 「アクセントの共通語化にかかわる単語親密度の影響」『日本方言研究会第 73 回研究発表会発表原稿集』27-36

(吉田健二: 本学非常勤講師、勝田亜弓・苺谷美沙希・川北梓・小島愛加・柴田彩花・清水未希・松尾江利子・若園篤・渡邊彩・渡邊千裕: 文学部国文学科 3 年生)